



8 源氏物語図屏風 狩野探幽 六曲一双

紙本着色 江戸時代(十七世紀)  
各総縦一六七〇 幅三七〇〇

左右両隻をあわせて『源氏物語』五十四帖総てを、金の霞と雲によつて区切られた小画面に描く。右第一扇最上部の「桐壺」から下へ、次扇へと進み、左第六扇最下部へと単純に配列するのではなく、「須磨」の配置順序を繰り上げて隣接した「明石」とひと続きの海景を描くなど、全体の構図が配慮されている。また主題ごとの構図によつて霞や雲の形は広狭自由で、室内と室外、また人物と自然景の組み合わせにも配慮が行き届いている。画面中には、十二世紀前半に制作された『源氏物語絵巻』(国宝、徳川美術館・五島美術館所蔵)にまで遡る伝統的な図様を踏襲している画面がある一方、作者狩野探幽(一六〇二〜一七四)の創意によると思われる図様もみられる。

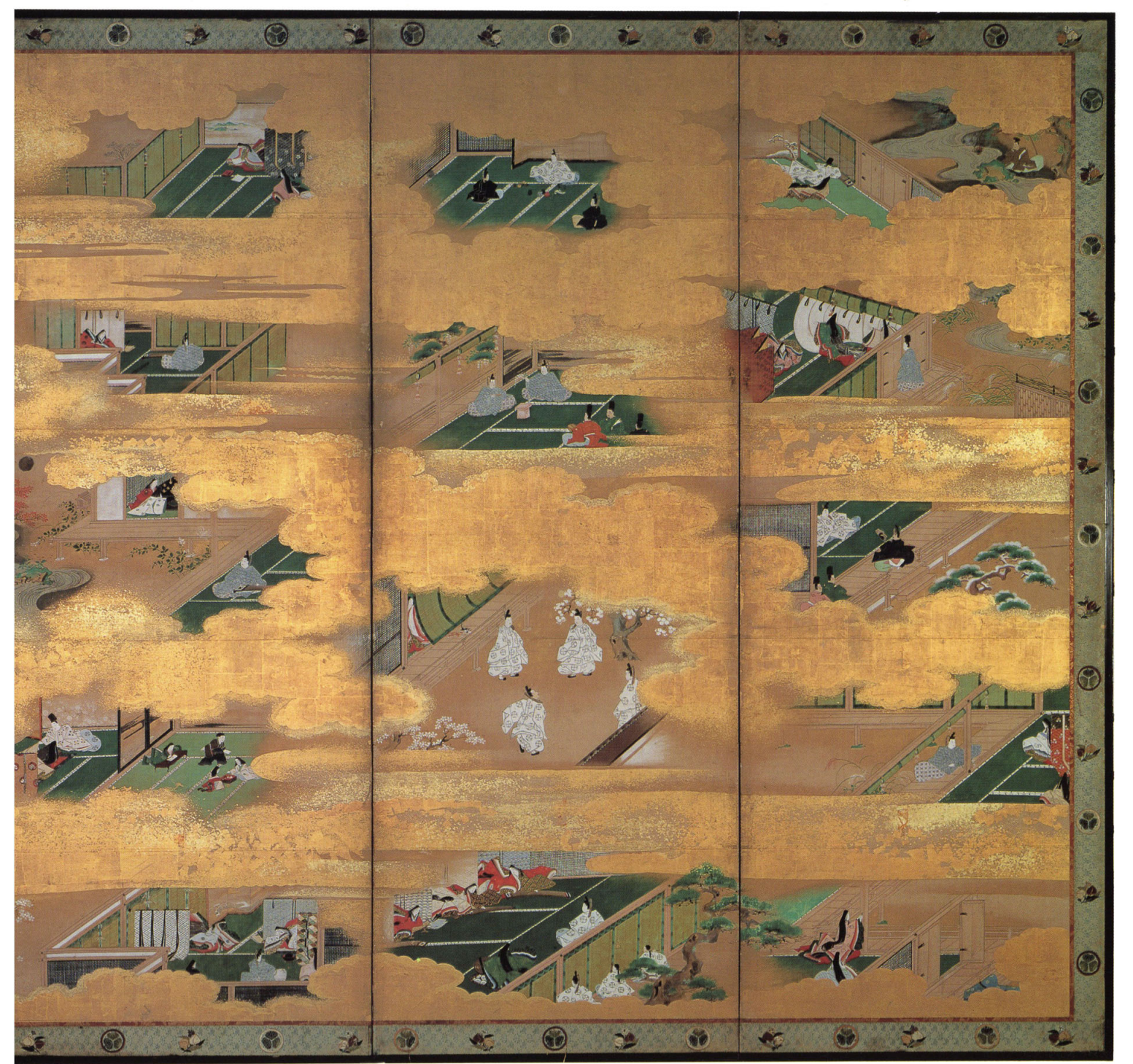
本屏風は、寛永十九年(一六四二)の八条宮智忠親王と前田利常の女・富姫の婚礼の際に、將軍の養女として嫁ぐ富姫のために徳川將軍家から贈られた品と考えられている。確かに屏風箱には同時期の葵文の金具が裝飾されており、徳川家との関係が深いことは疑いないが、葵文の飾金具は七宝で裝飾されている点や、緑には葵文と桃花枝が繡取されている様子から考慮すると、贈り主は富姫の伯母にあたる後水尾院の妃・東福門院ではないかと推察される。

また本屏風には、通常の屏風とは異なり、各隻内側下隅の金雲の中に探幽の壺形印が目立たないように捺されている。これまで、本作品は探幽の基準作『東照宮縁起絵巻』(一六四〇年)と比較して、その精緻な様式や技法が近似することから壮年期の探幽の作品と考証されている通り、本作品もほぼ一六四二年頃の制作と考えて良いであろうが、全画面を詳細に検討していくと、制作には探幽自身のほかに弟子が加わっていることも確かである。



右隻

22	玉鬢	17	絵合	13	明石	12	須磨	5	紫若	1	桐壺
23	初音	18	松風	14	滯標	9	葵	6	末摘花	2	帚木
24	胡蝶	19	薄雲	16	関屋	10	賢木	7	紅葉賀	3	空蟬
25	蛍	20	朝顔	15	蓬生	11	花散里	8	花宴	4	夕顔
26	常夏	21	乙女								



左隻

50 東屋	45 橋姫	41 幻	36 柏木	32 梅ヶ枝	27 篝火
51 浮舟	46 椎本	42 匂宮	37 横笛	33 藤裏葉	28 野分
52 蜻蛉	47 総角	43 紅梅	38 鈴虫	34 若菜上	29 行幸
53 手習	48 早蕨	44 竹河	39 夕霧	35 若菜下	30 藤袴
26 夢の浮橋 (手習?)	49 宿木		40 御法		31 真木柱

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

旧桂宮家伝来の美術——雅と華麗

三の丸尚蔵館展覧会図録 No.13

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 大塚巧藝社

翻訳 鶴岡厚生

発行 宮内庁

平成八年九月二十一日発行

© 1996, Museum of the Imperial Collections